

大阪のおいたちと 東成のかかわり



大阪夏の陣屏風(部分)

●原始時代の大阪とひがしなり

大阪市の地形は非常に平坦で、上町台地と呼ばれる丘陵をのぞけば、ほとんど全域がゼロメートルに近い低地から成っています。東成区域も全般に低地です。『大阪平野発達史』（梶山彦太郎・市原実共著）によれば、今から約7,000～4,000年前、上町台地の東側は生駒山麓まで広大な河内湾が広がっていました。

その後、河内湾は、海面が3メートル余りも低下したのに加え、淀川と大和川の堆積作用によって海岸線がしだいに退き、やがて、河内潟(約3,000～2,000年前)へ、さらに河内湖(約1,800～1,600年前)へと水域が縮小してゆき、しだいに大阪平野が形成されてきたということです。

昭和30年に現在の今里西1丁目で幅1メートル余りの半円筒型楠材2本を接合した全長6メートル余りの独木舟が出土しました。尾部付近に舟をつなぐための杭が残っていたため、この付近で繫留されていたことが分かり、また、同じ地層から出土した古墳時代末期(6世紀)の特徴を示す土師器などが見つかり、その出土状況からみて遠くから流れてきたものではなく、この地で使用されていたものと判定されました。そのため、すでに6世紀頃には今里付近にこのような独木舟

と土器を用いる人びとが定住していたことが明らかになったのです。

●古代の大阪とひがしなり

第2次大戦後、古代遺跡の発掘が大きく前進、上町台地北部で幻の難波宮の遺構が相次いで発見され、ついに7世紀造営の難波長柄豊碓宮(645年=孝徳朝)と8世紀の聖武朝難波宮の明確な位置と構造が明らかにされました。大化改新で名高い孝徳朝難波宮(前期難波宮)と奈良時代盛期の聖武朝難波宮(後期難波宮)とが、大阪城の南の法円坂で、方位が少し変わるもののほとんど重なり合うような位置で見つかったことから、上町台地が古代の都城造営の立地条件に適していたことがうかがわれ、仁徳朝の高津宮についても、この付近に造営されていたのではないかと推定されるようになってきました。

最近、難波宮跡に隣接する法円坂の中央体育館敷地内で、5世紀後半と推定される大規模な倉庫群の遺構が、16棟も発見され、非常に注目されました。実在年代が5世紀前半といわれている仁徳朝の高津宮と何らかの関わりがあるのかもしれませんが。

このように、上町台地は大阪の歴史の発祥の地といえます。そしてこの丘陵の内外は、往古より難波と呼ばれ、奈良時代初期、和銅6年(713)の郡名改正までは、丘陵の東部を難波大郡、西部を難波小郡と呼んでいました。この年、難波大郡が東生郡に、小郡が西成郡に改称され、東生(ひがしなり)が歴史に登場しました。

●中世の大阪とひがしなり

長岡京遷都(784年)とともに難波宮が廃止されてから以後の難波の地は、長岡京に続く平安京の繁栄をよそに、長い間、寒村僻地の状態に陥り、鎌倉時代以降も歴史の表舞台に浮かぶことのないまま数百年の年月が過ぎてゆきました。東成区域についても、14世紀の南北朝動乱期に一時、四天王寺の所領になったことが知られることや、15世紀に深江の菅笠作りが独占的な座を結成して活躍していたことが知られる程度で、詳しいことはよくわかりません。

ところで、大阪(古くは大坂)という地名は、室町時代の明応5年(1596)に、浄土真宗第8世

法主蓮如が「摂州東成郡生玉ノ庄内大坂トイフ在所」に「一宇ノ坊舎ヲ建立」したことから初めて歴史に登場したといえます。当時、「大坂」というのは、今日の大阪城の中心部付近に相当するごく限られた土地を指したものでした。

大阪の地は、石山とも呼ばれましたが、人家の一軒もない虎狼の住処だったと、ある古記録は伝えています。しかし蓮如を慕う信者が参集してたちまち寺内町が出来る賑わいを示し山科本願寺の大坂御坊として発展しました。これが後の大坂本願寺すなわち石山本願寺の前身です。

しかし石山本願寺は、11世顕如のとき、織田信長との10年にわたる戦いの後、天正8年(1580)寺地を信長に明け渡して紀州へ退去しました。そのとき堂塔伽藍も寺内町も炎上し、中世の大坂は地上から姿を消してしまいました。

●近世の大坂とひがしなり

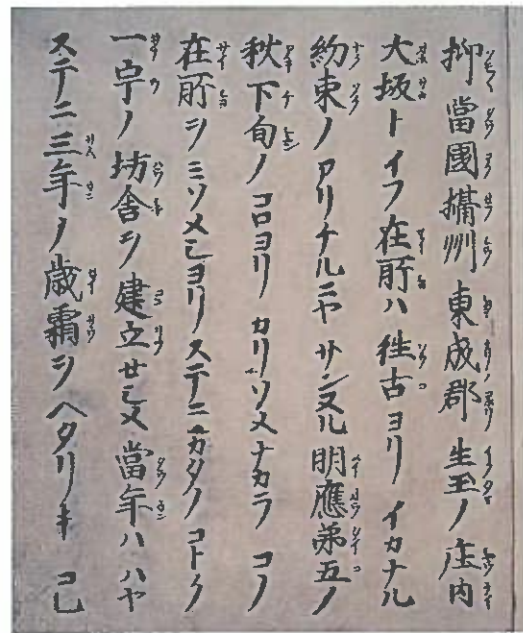
石山本願寺焼亡から3年後の天正11年(1583)、この地を手中にした豊臣秀吉は、そこに大坂城を築き、城下町を建設して、ここを拠点に全国統一にのりだしました。秀吉の大坂城は、元の石山本願寺の規模をはるかに上まわり、中心部の本丸には5層の大天守がそびえ、4重の堀をめぐるした日本一の巨城でした。

今日の東成区の地域は、大坂城の東側に隣接し、玉造口と大和口という重要な二つの出入口に面していました。

秀吉・秀頼時代、今日の大阪市域は基本的には豊臣家直轄領であったと思われませんが、詳細はわかりません。秀吉夫人北政所(後の高台院)の所



浪華の賑わい・二軒茶屋の図



本願寺蓮如上人御文章

領(当初1万石、後1万6千石余)が散在し、当区内の深江村574石もその一部でした。

夏の陣(1615年)の後、松平忠明が大坂藩主となり、東成区域は、深江村をのぞき、大今里村・東今里村・西今里村・本庄村・中道村および木野村の一部(後の東小橋村)などがすべて松平領となりました。元和5年(1619)、大坂藩領は幕府直轄の天領になり、翌年から始まる大坂城再築と城下町復興とともに、大坂の地は『大坂三郷』として繁栄しました。上記の村々もこれ以後、幕末にいたるまで、天領またはそれに準じた支配を受けました。深江村も寛永元年(1624)の高台院没後は天領となっています。

東成区域の土地は低かったので、江戸時代に入っても、度々洪水に見舞われましたが、一方では開墾も行われ、大坂近郊の農村生活が続きました。商都大坂の繁栄とともに奈良街道(暗峠越)が大坂と奈良を結ぶ主要道として発達し、大坂市中からの街道口にあたる中道村(現東小橋1丁目・中道3丁目)の二軒茶屋や街道沿いの深江村も賑わいをみせました。古代以来の伝統的な特産品である深江の菅笠も、主にこのような旅行者向けの商品として人気を得たもののようです。なお、この地には、江戸前期の優れた万葉学者契沖が住職だった大今里の妙法寺や平安初期の「延喜式」以来の比賣許管神社などがあります。

東成の おいたち

●地名の起り

私たちの住む郷土「ひがしなり」の地名の起りは、今から約1,300年前の大変古い時代にさかのぼります。

太古の大阪の地形は、現在上町台地と呼ばれている丘陵地帯と、その東西に難波江とか難波瀉と称された入江に、難波の八十島と古歌に読まれた大小の島々が点在する美しい島や入江であったらうと想像されます。このような入江の中にあった往古の当地も、時代が下るに従い、各河川の上流から、永い年月の間にはこびこまれた土砂や、上町台地から落ちる土砂により、次第に陸地化され新しい土地が出来あがったと考えられます。

この丘陵の東部を、古くは“難波大郡”西部を“難波小郡”と称したことが古記録に見えますが、西部の小郡に対し、東部は大郡であり、西よりも東の方が発達していたことを物語っています。

東成区の古代における状態を物語る証拠として、独木舟の出土があります。これは昭和30年(1955)8月、大今里西1丁目の水道局今里営業所裏の下水工事現場から発見されたもので、楠材の長さ約6m、巾約1m程のカマボコ型の独木舟で

す。周辺からは古墳時代の土器も発見され、約1,000年程前のものと言われ、付近一帯には相当早くから集落が存在し、人が住みついていたと思われる。

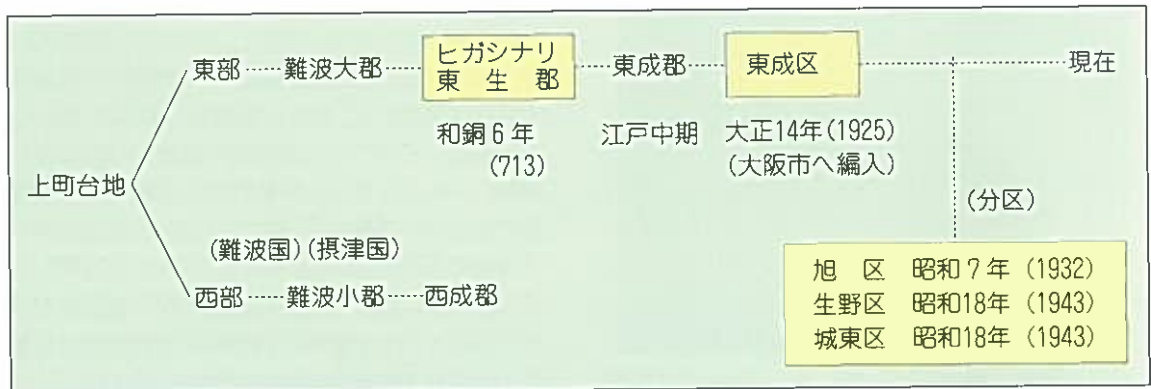
また、昭和41年(1966)8月に地下鉄千日前線の今里駅工事現場からクジラの骨が出土したことから、大昔、当地が入海であったことがうかがわれ、まことに興味深いものがあります。

さて我が国において、郡郷の名称を公式に定めたのは、元明天皇和銅6年(713)であり、「郡郷の名は好字にて、且二字を用うべし」とされ、東部の難波大郡を「東生(ひがしなり)」、西部の難波小郡を「西成」と呼び定められました。この両郡の境界は現在の天王寺区上汐町筋であったと言われています。

この東生の名は上町台地の東に新たに生れた集落というところから、起こったものと考察されます。その後多少の変遷はありましたが、江戸時代中期頃に東成と文字が変わるまで、千余年の間、郡名の呼び名は変ることなく受け継がれてきたのです。

現在の大阪市の大半は、明治初年までは摂津国東成郡と西成郡に属しており、明治22年(1889)に市制町村制が施行され、ここに改めて大阪府「東成郡」が誕生したのです。

私たち東成区民は千年以上に及ぶ歴史的な名称“ひがしなり”を区名として受け継ぎ、浪速大阪の発展とともに栄えてきたことを誇りとし、いつまでも“ひがしなり”を守り育てていきたいものです。



●行政の移り変り

当区行政の沿革をたどると、南北朝時代の正平6年(1352)四天王寺秋の坊日記に「新開莊」……云々との記録があり、この新開莊は現在の東成区の大半をしめ、当時は四天王寺の所領であったことが知られます。



東成郡における「新開莊」の位置

「新開莊」の名は文禄3年(1594)、有名な秀吉検地の際に廃止され、江戸時代に入ると当区内の各村は、幕府直轄の天領地となり、大坂城代の知行地または代官支配地となりました。大坂旧市の鈴木町(現国立大阪病院付近)および谷町の2カ所に設けられた代官所が司農行政に当たり、各村々においては、庄屋・年寄・百姓代の村方三役により村々のとりまとめが行われ、明治維新までこの関係が続けられてきました。

江戸時代には当区内に11の村々が存在し、(表1)は江戸時代の行政管轄を表したものです。

明治元年(1868)の廃藩置県により大阪府が誕生し、同5年(1872)に新政府により戸長役場制度が布かれました。当区は大阪府第5大区第2小区に編入され、次の(表2)に示すとおり、およそ1万石内外を1小区として区長1名をおき、区長戸長役場が設置され、各村には村用掛を置いて各種行政が行われました。

明治22年(1889)市制町村制が施行され、当区は東成郡役所(四天王寺秋の坊、のち六万体制町)

表1 江戸時代(江戸初年から明治4年まで)

村名	現校下	支配関係	石高
森村	北中道	徳川代官	349石
中道村	中道	〃	451.
本庄村	中本	〃	805
西今里村	} 東中本	大阪城代	232
中浜村		〃	532
深江村	深江	京都所司代	766
東今里村	宝栄	大阪城代	456
大今里村	今里・神路	徳川代官	980
東小橋村	東小橋	〃	107
片江村	片江	大阪城代	456
猪飼野村	大成	〃	

注) 現校下は旧村におよそあてはめたもの

表2 戸長役場制度(明治5年から明治21年まで)
大阪府第5大区第2小区

番組	編成村名 (当区関係村のみ)
一番組	猪飼野村
二〃	東小橋村
五〃	森村 中道村
六〃	本庄村 西今里村
八〃	深江村 東今里村
九〃	片江村 大今里村

表3 合併新村(明治21年から大正14年まで)

新村名	合併村名(当区関係村のみ)
鶴橋村	東小橋村 猪飼野村
中本村	本庄村 中道村 西今里村 森村
南新開莊村	東今里村 大今里村 深江村
小路村	片江村

の所轄下に次の(表3)のとおり合併村となり、新村名で発足しました。

その後、大正元年(1912)には中本村が町制を布き、同5年(1916)には南新開莊村が神路村と改称され、同14年(1925)に大阪市に編入されて東成区となりました。当時の区域は広大でしたが、その後、昭和7年(1932)に旭区が、また同18年(1943)に生野区・城東区がそれぞれ分区し現在に至っています。

●明治のひがしなり



淀川大洪水を伝える当時の号外

江戸幕府体制が崩壊し明治新政府となりましたが、慶応から明治初年頃までは、「朝令暮改」といわれたごとく、諸制度の改革は実に頻繁でした。

明治元年（1868）に大阪府が設置され、その管轄下での明治5年（1872）の戸長役場制度や、同22年（1889）の市町村制の施行などの行政の変遷については、行政の移り変りで述べたとおりです。

さて明治期前半の当区は、区内を南北に流れる平野川・猫商川などの河川により、水利の便に恵まれ、主に綿・米・麦・菜種などを栽培する農村が点在するのどかな田園地帯でした。

明治12年（1879）大阪造兵工廠、明治23年（1890）城東練兵場が設置され、また、中期頃に西部の一部が大阪市に編入されるなどの影響により中本村（現、北中道・中道・中本の校下）方面は住宅地や家内工業地となり、市街地に隣接する鶴橋方面は商工業が目立ち始めるなど、漸次西部から開発が進みました。しかし、明治時代の当区はまだ農業が主であり、水利問題、水害予防は各村政の重要な課題でもありました。明治2年（1869）に五千石堤防水害予防組合（後の淀川左岸水害予防組

合）が設立され、以後の水防行政に重要な役割を果たすこととなります。

明治期の中で当区の最も大きな出来事は、明治18年（1885）の淀川大洪水による悲惨な被害です。この大洪水は、6月中旬から7月初旬にかけて大雨が降り続き、6月17日枚方付近で淀川堤が決壊し、遂に7月2日早朝から空前の大洪水となりました。北河内・中河内を始め、東成・西成郡一帯は一夜にして大湖水が出現し泥海と化したと記録されています。当区内の浸水水位は4mにも達し、今なお区内旧家の土蔵にその痕が残り、当時のものすごさを物語っています。

当時の西今里村では、大今里1丁目にある通称楠神社（八王子神社お旅所）の楠の大樹（樹齢1,200年）に、村人四十数人が登り、数日後に救助船に救出され、かろうじて難をのがれたということです。

また区内の家屋の流失や、田畑の冠水、死者・行方不明者など被害はおびただしいもので、想像を絶する惨状であったと語り継がれています。

このような大被害から淀川改修の議が起り、明治30年（1897）に改修工事が着工され、千数百万円の巨費（当時）と10年余りの歳月を費やして、同42年（1909）にさしもの大工事も完成をみるに至ります。毛馬の閘門を設け、新淀川を開き、現在の大川（旧淀川）の主流を、十三で旧中津川などと合流する流れに変えることにより、以後、淀川からの大洪水の心配がなくなりました。

一方、学校教育をみますと、早くも明治15年（1882）に阪東小学校（神路小の前身）、同20年（1887）には東生尋常小学校（中本小の前身）がそれぞれ創立されています。

また交通機関も、明治28年（1895）に城東線（現在のJR環状線）が民営鉄道として開通し、玉造駅が設置されるに伴い当区の地域発展と住民に多大の便を供してくれました。

●大正のひがしなり

明治22年（1889）に大阪市制施行、同30年（1897）に第1次市域拡張がなされます。

この時、当時の鶴橋村と中本村の一部が大阪市

に編入されますが、これら両村は西部が市域と隣接する関係から、他の区域にさきかけて以後の発展をみるることとなります。

大正期に入りますと、元年（1912）10月に鶴橋・中本の両村は町制を布くこととなります。

また、従来の農村もしたいに住宅地に転換され、地価の高騰に伴い土地開発会社の創立をみるに至る状態で、かつてはのどかな農村地帯であった当区も、著しい発展の途をたどりました。

大正3年（1914）に大軌電車（現近鉄）が開通し、鶴橋、深江（現布施）両駅が新設され、明治28年（1895）開通の城東線（現環状線）と共に交通機関の便に恵まれたこともあって、自然に人口の増加をみるに至りました。明治42年（1909）の当区域内の人口は約1万7千人でしたが、大正13年（1924）には10万人を越す勢いとなり、各町村の行政も多事にわたりました。

人口の増加に伴い、大正4年に中本第2（現中道小）、同11年（1922）に鶴橋第3（現大成小）、中本第4（現北中道小）の各尋常小学校が次々と新設開校されます。

商工業の発展と人口増加により都市化へと変貌する中、道路も次第に整備され、上下水道なども各町村毎に漸次整備拡張され、大阪市に編入される条件を名実ともにかね備える状況となります。

いよいよ大正14年（1925）4月、大阪市第2次市域拡張により正式に大阪市に編入され「東成区」として発足することになりました。

ここにおいて1千年以上の歴史ある東成郡に終止符をうち、商業都市大大阪の一行政区として、伝統ある東成の名称をそのまま区名に冠しての第一歩を踏み出しました。

この「東成区」は、中本・鶴橋・鯉江・榎並の各町、神路・小路・生野・城東・榎本・城北・古市・清水の各村との4町8ヵ村で編成され、初代区長には、当時の郡長であった木下貞太郎氏が就任しました。

当時人口は23万人強と多く又地域も極めて広大であったため、区役所を旧鶴橋町役場に、第1出張所を今福に、第2出張所を千林にそれぞれ設置し、区行政がスタートしました。

THE OSARA MARCHING SHIMBUN 日一月四年十四正大 (可読物製郵種三等郵便) (四日)

大阪毎日新聞

第四十共刊夕紙本

輝かしい「大大阪市」は 愈々けふから實現

面積は東京の二倍、人口は世界第六位、これを築き上げた市民の「金」と「人」の力

新に施行される事業の大観

一 幹線道路の一新
一 聯絡を急務

各區の面積

人口並に戸數調べ

一 生産の都としての 大人反を築きたい

大大阪實現に



大阪市第2次市域拡張(東成区発足)を伝える当時の新聞記事

●昭和のひがしなり (終戦まで)

昭和5年建設の区役所旧庁舎



昭和に入りますといろいろな面で一層都市化が進み、更に発展の一途をたどります。区勢の伸長に伴い区画整理が行われ、上下水道や公園などの公共施設がより整備拡張されます。昭和5年(1930)には区役所庁舎が発足当初の旧鶴橋町役場から現在地に新築移転します。

昭和初期の東成区は、現在の生野・旭・城東・鶴見の4区をも含む広大な区域を有し、人口も33万人を数える大区であり、区政は複雑繁忙を極めます。

そのために昭和7年(1932)10月、当時の第1・2出張所の区域を「旭区」しとして分区するに至りました。その後も区勢はますます発展し、同18年(1943)に再び、「生野区」・「城東区」が分区しました。当区は大阪市に編入当初から、地理的にも中心的存在であったこともあり、1,300年の歴史的な“ひがしなり”の名称を受け継ぎ今日に至っています。

「生野区」・「城東区」の分区後は面積は約4.5km²、当時22区中18位という大変狭い区域となり、人口密度はきわめて高い状態でした。

さて、昭和という時代は、大阪市が飛躍的に発展した時期です。昭和の御大典を記念して、大阪

のシンボルとも言うべき大阪城が、市民の浄財をもって見事に完成し、御堂筋を始めとした近代的道路網の整備や地下鉄の開通というような、近代都市の機能の充実がなされ、名実共に日本の代表的な一大商業都市へと発展します。

これまでの当区の交通機関は、西の城東線(環状線)と南の大軌(現近鉄線)だけでしたが、このような大阪市の発展に伴い、昭和2年(1927)に市電が下味原から今里まで延長開通し、城東線も高架化・電化がなされ、同8年(1933)には「森の宮」・「鶴橋」両駅の開業と共に、区民の足は飛躍的に便利となりました。

小学校も、東小橋・今里・東中本・深江・片江と次々に新設され、戦後の宝栄小学校新設により今日の11校となります。

また、各種公共社会事業施設の充実や、工業化の発展とともに大阪市の東部をしめる重要な位置として繁栄の道を歩みます。

しかし、昭和9年(1934)9月21日、大阪方面を襲った室戸台風は、北中道・中道・神路・中本の各小学校の校舎をなぎ倒し、教員、児童に痛ましい犠牲者を出すという、悲惨な爪痕を残しましたが、これを機に校舎も漸次鉄筋コンクリート造りに生まれ変わるようになりました。

戦前から東成区は、中小の企業が多く、大阪市東部に於ける工業地帯を形成し、鉄工・繊維を中心として画期的な発展をとげてきました。

昭和12年(1937)頃より戦時体制が強化される中、各校下毎に町会、隣組の組織が結成され、さらに戦況が激しさを加えるにつれて区民の生活も圧迫されることとなります。

昭和20年(1945)3月13日夜の大阪大空襲を皮切りに、区内のあちこちが爆撃で罹災し、殊に同年6月15日の空襲はすさまじく、6,363戸の全焼家屋と20,699人の罹災者を出すに至りました。これら被災地の多くは、当区の西部に集中していました。

戦後、区民はあらゆる苦難から立ち上がり、東成区復興の力強い槌音を響かせ、明るい住みよい町づくりに、力を合わせながら歩み出したのです。